

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 26 日現在

機関番号：15401

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2012～2014

課題番号：24730509

研究課題名(和文) 社会規範における「当為的信念」の成立基盤についての研究

研究課題名(英文) a study for the emergence of injunctive norms.

研究代表者

清水 裕士 (SHIMIZU, Hiroshi)

広島大学・総合科学研究科・助教

研究者番号：60621604

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,200,000円

研究成果の概要(和文)：社会関係における規範の成立として、最も基本的な人間関係である友人関係に焦点を当て、友人関係における非互恵的利他性の規範がいかにして形成されるかについて検討を行った。そこで「友人関係のかけがえのなさ」に注目し、友人関係は互いに病気や怪我といった危機を管理するために、互いに代替不可能な関係を作ることによって、非互恵的利他性の規範が形成されると予測した。

研究の結果、かけがえのない関係を作ることが非互恵的利他性の信念を形成していることが明らかとなった。また、友人からかけがえのない人と思われているかどうかをチェックするために、友人に対する協力の要請を間接的に行うことが利用されることも明らかとなった。

研究成果の概要(英文)：We focused on friendships, which is the most fundamental of human relationships, and investigated the norms of non-reciprocal altruism in close friendships, in order to identify the mechanisms of social norm formation. We assumed that the mutual irreplaceability in friendship was a key concept predicting the formation of beliefs about non-reciprocal altruism. Helping friends with irreplaceable abilities or talents is an adaptive behavior, because such, mutual irreplaceable friends have a crisis management function of avoiding the risk of illnesses or injuries, by helping each other. Several studies have indicated that the formation of mutual irreplaceability increases the shared belief in non-reciprocal altruism. Also, it has been indicated that people use indirect requests for social support seeking, in order to assess whether their friends are true friends or not.

研究分野：社会心理学

キーワード：社会規範 文化的信念 ソーシャルサポート

1. 研究開始当初の背景

社会関係における規範の成立として、最も基本的な人間関係である友人関係に焦点を当てた。具体的には、友人関係における非互惠的利他性の規範がいかんして形成されるかについて検討を行った。非互惠的利他性の信念は、「友人に対しては相手に見返りを期待せずに助けるべきだ」という信念のことである。

進化心理学においては、友人関係のような継続的な関係における協力行動は互惠的利他主義による説明が行われてきた。互惠的利他主義とは、協力する相手に限り協力する、という限定的な利他主義のことである。

しかし、友人関係では実際には、「相手が協力してくれる限りにおいて協力する」という考え方はむしろ敬遠される傾向にあることがわかっている(Clark & Mills, 1979)。それでは、進化心理学と社会心理学の乖離はどのように生じるのだろうか。

そこで注目したのが「友人関係のかけがえのなさ」である。この考えでは、友人関係は互いに病気や怪我といった危機を管理するために、互いに代替不可能な関係を作る、というものである。つまり相手の資源に対する返報として協力するのではなく、相手の存在そのものが危機管理機能という資源として意味を持つため、相手が協力するしないにかかわらず協力する必要がある、と考えられる。

2. 研究の目的

本研究は友人関係が「人々が病気や怪我などといった危機を管理するための装置である」という友情の進化仮説に基づいて、友人における非合計的利他性の規範が成立するプロセスを検証することを目的とした。具体的にはかけがえのない人を助けることで、相手からもかけがえのない人と思われることで、互いにかかけがえのない関係を形成し、危機管理を行っていることを検証した。

また、他者からかけがえのない人と思われるためには、他者への協力だけではなく、他者からどのように協力を得るかも考える必要がある。そこで、友人からの協力を要請する方略についても検討を行った。

友人に対する援助の要請には、直接的な要求と間接的な要求がある。日本においては、とくにこの間接的な要求が欧米に比べて多く用いられる。

本研究の第二の目的として、友人への間接的な要求がどのような機能を持っているのか、友人のかけがえのなさ仮説都の関連で検討する。

3. 研究の方法

研究 1

友人ペアの調査を行った。217 名を対象に、Web を用いた調査を行った。男性は 98 名、女性は 119 名であった。また年齢の範囲は 15 歳～69 歳であった。

調査では、以下の尺度について回答を求めた。友人達からのかけがえのなさ評価：かけがえのなさ尺度(清水, 2012)を改編し、「私の友人たちにとって、私はかけがえのない人である」などの 8 項目を用いた(5 件法)。精神的健康：諸井(1996)の身体・精神的健康尺度のうち、精神的健康を測定する 4 項目(5 件法)を分析に用いた。高得点が健康であることを意味するように、得点を逆転した。人生満足度：Diener et al. (1985)の人生満足度尺度を用いた(5 項目 5 件法)。この際、表現を「～である」を「～だろう」といった未来形に変更した。

研究 2

Web 調査を用いて日本全国 600 名をランダムにサンプリングした。実験では、比較的よく会う友人を一人思い浮かべてもらい、回答者が友人といるときに所持金が少ない状況で、友人がお金を貸してくれるという場面を思い浮かべてもらった。このとき、回答者のサポート要求方法は参加者要因で操作した(要求要因)。

1. 直接的な要求条件：「ちょっと今お金ないから貸してよ」

2. 間接的な要求条件：「ちょっと今お金がないんだよね」

3. 丁寧な要求条件：本報告では省略

従属変数は、相手がお金を貸してくれた利他的意図(あなたのためを思って)と好意認知(友人はあなたのことを大切に思っている)を測定した。その他、友人のかけがえのなさ(清水, 2012)、自尊心(山本ら, 1982)を測定した。

研究 3

Web 調査によって 200 名をランダムサンプリングし、回答に不備のあるものを除外し、最終的に 169 名のデータを得た。測定変数直接的な要求と間接的な要求の使用の程度をそれぞれ 4 項目で測定し、それぞれの平均値を用いた。また、関係流動性尺度(Yuki, et al., 2007)によって人間関係の自由度を測定した。因子分析の結果、「選択・離脱の自由度(の低さ)」因子と、「出会いの多さ」因子の 2 つに分かれた。以後、選択・離脱の自由度項目の平均値を、「人間関係の自由度の低さ」得点として用いた。そして、Hashimoto & Yamagishi (2013)の文化的自己観尺度によって独立的、調和追求、悪評回避それぞれの自己観を測定し、それぞれの平均値によって得点化した。

4. 研究成果

研究 1

Tooby & Cosmides (1996)は、死亡リスクが高い環境では互惠的利他主義はパラドックスに陥ると指摘する。それは本当に他者からの投資を必要とする人は返済能力が低いから、誰からも投資を受けられないという問題(Banker's Paradox)である。一方で彼らは、他の人が持っていない代替不可能な特性や技術を持つことで、他者からの投資を受ける可能性を高めることができると論じている。なぜなら、そのような「代替不可能な資源を持つ人=かけがえのない人」が死んでしまったら取り返しがつかない損失をこうむる可能性があるからである。よって、かけがえのない人になることはもちろん、その「かけがえのない他者」に対して、その人がいなくならないよう、困っているときに助けることも適応的になりえる。ここに非互惠的利他主義の適応価値がある。

次に清水・嘉志摩・浅野(2011)は、困っているときに利他行動を受けた側は、その相手のことをかけがえのない他者だと評価するようになるだろうと予測した。なぜなら、1. 困っているときは返報することが難しいため、そのときの利他行動は非常にコストがかかる。2. 返報性が期待できないコストの大きな利他行動は、互惠性ではなく「自分を助けるために行動した」ことをシグナリングする、3. 返報を期待せずに自分を助けてくれる人が少数であるなら、自分にとってその人が「かけがえのない他者」であると評価する、と考えられるからである。実際、清水ら(2011)や清水(2012)は、返報性が期待できない状況の援助行動が「自分のためを思って助けてくれた」という NRA の意図を高めること、またこの NRA 意図がかけがえのなさや高めることを明らかにした。このとき、返報性を期待する互惠的利他主義に基づく意図(RA意図)ではかけがえのなさはむしろ低下する傾向があった。

上記のような、かけがえのなさ評価のメカニズムがあるなら、かけがえのなさの評価は相互性が形成されると予想される。それは、1. かけがえのない人が困っていたら、助ける 2. 困っているときに助けられたら NRA 意図を検知する 3. 相手をかけがえなく思う 1' . かけがえのない人が困っていたら・・・というようにループを形成するからである。

これまでの議論から、相互のかけがえのなさ評価の形成は、友人関係に「困ったときに助け合う」という危機管理機能を成立させると考えられる。つまり、相互にかけがえのなさ評価が高い友人関係は、「困ったときは助けてもらえる」という NRA 信念を共有し、さらに心理的な適応も高くなるだろう。なぜなら、病気や怪我といったアクシデントは完全

に回避することができないため、そういった危機のときにいつでも助けてくれる他者がいることは適応上、不可欠だからである。相互のかけがえのなさが高い状態は、自分たちの関係がこういった危機管理機能を持っていることを示すバロメーターになっている可能性がある。

これらの議論から、困っているときの利他行動が相互のかけがえのなさを形成し、結果として NRA 信念や心理的適応を高めることを検証した。

マルチレベル分析の結果、予測は支持され、相互のかけがえのなさは共有された NRA 信念とペアの心理的適応と強く関連した。また、互いの援助行動が直接に主観的幸福感や NRA 信念を形成するのではなく、相互のかけがえのなさが媒介したことは、本研究の予測を強く支持するものである。

これらの結果は、相互のかけがえのなさが形成されることによって、友人関係が「いつでも助けてもらえる」という危機管理の機能を持つようになることを示唆している。

研究 2

研究 2 では、以下で論じるように、友人への間接的要求が、友人が自分にとってかけがえのない友人であるか否かを査定する機能がある可能性に注目した。

東アジアでは、明示的なサポート要求をして相手がそれに応じてくれた場合、「相手が自分のためを思って助けてくれた」のか、「頼まれたから断れなかったから助けてくれた」のか、その意図を区別できない。なぜなら、東アジア文化では関係が固定的であることから関係悪化はリスクが高く、サポート要求を拒否できないからである。一方、サポート要求の意図を明示的にしない間接的要求では、相手がそれに応じてくれた場合、直接的に要求する場合に比べて「自分のためを思って助けてくれた」という意図を帰属でき、相手が真の友人であることを査定できる。

さらに、東アジアのように関係流動性が低く、友人選択の自由度が小さい場合、仲間集団内で自分を裏切るかもしれない人が共存していると考えられる (Adams, 2005; 竹村・佐藤, 2012,)。そのため、自分が困っている時に真に助けてくれる友人を弁別する必要性が高い。

これらを踏まえると、東アジアの人々は西欧の人々に比べて、たとえサポート需要の成功率が低くても、間接的要求を行うメリットがあると考えられる。

そこで、間接的要求が直接的要求と比べて 1. 相手の利他的な意図を帰属しやすく、2. 相手が自分を大切に思ってくれていると知覚しやすい、ことを検証した。

利他的意図を従属変数、要求要因と友人のかけがえのなさを独立変数とした順序回帰分析を行った(性別・年齢・自尊心を統制)。結果、要求要因の効果が有意($B = 0.27, p$

< .05)で、間接的要求のほうが利他的意図を感じていた。また、好意認知を従属変数とした順序回帰分析でも要求要因の効果が有意で($B = 0.31, p < .05$)、間接的要求のほうが高かった。また、かけがえのなさの交互作用はすべて非有意だった。

次に、利他的意図を媒介変数、好意認知を従属変数とした順序媒介分析を行った。結果、利他的意図は受容認知と要求要因の効果を完全に媒介した。

この結果から、日本において直接的にサポートを要求するよりも、間接的に要求するほうが友人からの好意を知覚することができるメリットがあるといえる。

研究3

本研究では、人間関係の自由度が低い環境において間接的要求の使用が促進されているのかを検討した。また、その効果が、悪評回避的な文化的信念によって媒介されるか否かを合わせて検討した。これは、人間関係が固定的な環境において、「関係悪化を避ける傾向が間接的要求の使用を促進する」ことを検討していることに相当する。

その際、本研究では地域単位における人間関係の自由度および文化的信念の効果を検討する。その理由は、1. 人間関係の自由度は環境的要因であること、2. 自分だけではなく、相手も悪評回避の傾向を持っていることを知っていることが仮説の前提となっていること、が挙げられる。

そこで、人間関係の自由度の低さが悪評回避的な文化的信念を高め、それによって間接的要求の使用が促進されるかどうかを検討した。

まず、回答者の居住地域の都道府県を9地方(北海道, 東北, 関東, 北陸, 中部, 近畿, 中国, 四国, 九州)に分類し、級内相関係数を算出したところ、選択・離脱の自由度($ICC=.09$)以外に、悪評回避($ICC=.08$)、間接的要求の使用($ICC=.07$)の級内相関が有意($ps < .05$)となった。また独立的自己観と直接的要求は、級内相関が負の値となった。そこでマルチレベル構造方程式モデルを用いて、個人レベルと地方レベルに分けてモデルを推定した。ただし、直接的要求と独立的自己観は級内相関が負であったので地方レベルの分析には用いていない。

まず、直接的要求、間接的要求それぞれを目的変数、人間関係の自由度の低さを説明変数としたパス解析を行った。結果、個人レベルでは直接的要求、間接的要求ともに正で有意なパスが得られた(直接: $B=0.17$, 間接: $B=0.33, p < .01$)。地方レベルでは、間接的要求のみについて正で有意な効果が得られた($B=1.32, p < .01$)。

続いて、文化的自己観を説明変数としたパス解析を行った(表1)。個人レベルでは、直接的要求は独立と調和追及に正の、悪評回避とは負の関連が見られた。一方、間接的要求

に対しては、悪評回避と正の有意な効果が見られた。地方レベルにおいても同様に、間接的要求は悪評回避のみから正の有意の影響があった。また、人間関係の自由度の低さは個人レベルでは直接パスが有意であったが、地方レベルでは有意ではなかった。

続いて、人間関係の自由度の低さと間接的要求の使用の関連を、悪評回避が媒介しているかを検討した。結果、間接効果は個人レベル、地方レベルともに有意であった。個人レベルでは部分媒介が、地方レベルでは完全媒介が成立した。このことから、人間関係の自由度の低い地方では、悪評回避的な信念が共有され、間接的要求を使用が促進されることが示唆される。

地方単位の分析において、人間関係の自由度の低さが間接的要求の使用と関連があったことから、社会生態学的な環境がその地方の人々のコミュニケーションスタイルを規定していることを示しているといえる。また、その影響は、地方で共有されている悪評回避的な文化的信念によって媒介された。すなわち、人間関係の自由度の低い環境が、周りの人に嫌われないようにふるまわなければならないという信念を共有させ、間接的要求の使用を促進させていることが示唆される。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 5 件)

1. 清水裕土・大坊郁夫 (2014). 潜在ランク理論による精神的健康調査票(GHQ)の順序的評価
心理学研究, 85, 464-473. 査読あり

2. 清水裕土 (2014). 家族システム論と個人の適応
児童心理学の進歩, 53, 73-93. 査読あり

3. 杉浦仁美・坂田桐子・清水裕土 (2014). 集団と個人の地位が社会的支配志向性に及ぼす影響
社会心理学研究, 30, 75-85. 査読あり

4. 杉浦仁美・坂田桐子・清水裕土 (2014). 集団間と集団内の地位が内・外集団の評価に及ぼす影響
- 集団間関係の調整効果に着目して -
実験社会心理学研究, 54, 101-111. 査読あり

5. Park, J., Haslam, N., Shimizu, H., Kashima, Y., & Uchida, Y. (2013). More human than others, but not always better: The robustness of self-humanizing across cultures and interpersonal comparisons. 査読あり

Journal of Cross-Cultural Psychology, 44, 671-683.

〔学会発表〕(計 10 件)

1. 平川真・清水裕土・鬼頭美江 (2014). 9月6日

友人査定戦略としての間接的要求(2) ~ 関係流動性の調整効果 ~
日本グループ・ダイナミクス学会第 61 回大会発表論文集, 64-65. 東洋大学

2. 平川真・清水裕土 (2014). 7月26日

友人査定戦略としての間接的要求
日本社会心理学会第 55 回大会発表論文集, 51. 北海道大学

3. 大坪庸平・山浦一保・清水裕土・八木彩乃 (2014). 7月26日

関係価値は共感を介して赦しを促進するのか?
日本社会心理学会第 55 回大会発表論文集, 102. 北海道大学

4. 清水裕土・平川真 (2013). 11月2日

日本における友人への間接的サポート要求(1)
日本社会心理学会第 54 回大会発表論文集, 24. 沖縄国際大学

5. 平川真・清水裕土・森永康子 (2013). 11月2日

日本における友人への間接的サポート要求(2)
日本社会心理学会第 54 回大会発表論文集, 25. 沖縄国際大学

6. 清水裕土・須田香苗・坂田桐子 (2013). 9月6日

異性関係における望まない性行為を抑制するための要因の検討
日本グループ・ダイナミクス学会第 60 回大会発表論文集, 200-201. 北星学園大学

7. 石黒格・竹村幸祐・清水裕土 (2013). 9月6日

危機は結束を高めるか
日本グループ・ダイナミクス学会第 60 回大会発表論文集, 114-115. 北星学園大学

8. 清水裕土・谷口淳一 (2012). 11月17日

危機管理装置としての友人関係
日本社会心理学会第 53 回大会発表論文集, 38. つくば国際会議場

9. 清水裕土 (2012). 9月11日
友人関係の「かけがえのなさ」と非互恵的利他性の信念
日本心理学会第 76 回大会発表論文集, 71. 専修大学

10. 清水裕土・浅野良輔 (2012). 9月22日

危機管理装置としての友人関係 友人関係の「かけがえのなさ」と非互恵的利他性の信念
日本グループ・ダイナミクス学会第 59 回大会発表論文集, 86-87. 京都大学

〔図書〕(計 1 件)

1. 清水裕土 著 (2014).
個人と集団のマルチレベル分析 ナカニシヤ出版 185 ページ

2. 小杉考司・清水裕土 編著 (2014).
Mplus と R による構造方程式モデリング入門 北大路書房 323 ページ

〔産業財産権〕
出願状況(計 件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
出願年月日:
国内外の別:

取得状況(計 件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
出願年月日:
取得年月日:
国内外の別:

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織
(1) 研究代表者
清水 裕土 (SHIMIZU, Hiroshi)
広島大学大学院総合科学研究科 助教
研究者番号: 60621604

(2) 研究分担者
()

研究者番号：

(3)連携研究者
()

研究者番号：